

## インターハイ 30 回記念

## OB インタビュー

質問：第 30 回大会実行委員長 吉澤雄大

お名前

鹿島田浩二

出場した大会・成績

1 回大会 個人優勝・団体優勝、2 回大会 団体優勝

出身高校

桐朋高校

あなたが走ったインターハイで印象に残っていることを教えてください。

第 1 回は 2 年生でしたが、当時インターハイをつくろうと、早実、川和、浦和などの高校生で集まって実行委員会を作りました。競技面の準備は OB に任せ、会場手配や宿泊先などの運営面は自分たちで行った記憶があります。記憶が定かなら 140 名程度集まり、そのプログラムとスタートリストを作ったのは私でした。

トレインは、個人が神奈川の阿夫利林道という丹沢大山付近の急斜面の地図、リレーが逆に平らなトレイン（海軍道路だったでしょうか）でした。両方優勝しましたが、今記憶に残るのはむしろ運営で皆で準備した記憶ですね。

第 2 回は高校 3 年で受験直後、トレーニングができておらず、個人戦は体力が持たず棄権した記憶があります。確か優勝タイムが 2 時間近いハードなコースでしたが、OB がそのために地図を用意してくれた分コースに想いを込めすぎたのかもしれませんが。残念ながらリレーの記憶がありません。

今年でインターハイは 30 回となりました。最近のインターハイの印象を教えてください。

申し訳ないのですが、オリエンテーリング自体からここ数年離れており、最近のインターハイの状況について詳しく知らないのですが、OB のみなさんがしっかり準備している印象がありますね。また、高校生の選手と会話してもインターハイが大きな目標の競技会になっていると感じます。規模は大きくないかもしれませんが、高校生の 1 番を決める競技会としてしっかり定着しているのだと思います。ここでしっかり結果を出すことは競技者として重要なステップと感じます。

今振り返ってあなたにとってインターハイはどんなものでしたか？

一言でいえば「通過点」です。インターハイで優勝することは、高校生としては素晴らしいことですが、長い競技歴を振り返れば、それは出発点とさえ言えるかもしれません。オリエンテーリングは奥が深いスポーツです。海外に目を向ければ、最高峰の WOC はもちろん、O-Ringen、JWOC とチャレンジングで高いレベルの競技会が無数にあります。もちろん

国内でも次のステップとしてインカレ、全日本とあるでしょう。あるいは、別の見方をすれば、セルフマネジメントを学ぶ競技であり、海外経験を通じてグローバルな感覚を養う場、ともいえます。奥行も幅も高校生の想像する以上に広いのがオリエンテーリングというスポーツです。皆さんにはインターハイを起点に、さらに真剣にこの競技に取り組んで欲しいと願います。

以下ご自由にご記入ください。その中で中高生へのメッセージもお願いします

体育の世界では、ゴールデンエイジという言葉があります。10歳から12歳で様々な運動能力が発達する重要な時期といわれます。オリエンテーリングでいえば、肉体的にも地図を認知する頭脳も、まさに今皆さんの年齢がゴールデンエイジといえるでしょう。今行う1時間の真剣なトレーニングは、20代の3時間、30代の10時間に相当します。誇張ではありません。真剣に取り組めばそれだけ可能性が広がる、そういう時期にいます。もちろん勉学も家族も友人も大切です。それを踏まえても悔いの残らないよう、1時間1時間を大切に準備してください。